平成２５年度　第１回入船地区学校統合懇談会議事要旨

１　開催日時　　平成２５年７月２日（火）　午前１０時００分～午前１１時３０分

２　開催場所　　浦安市文化会館第一練習室

３　出 席 者

（委員）

学校統合アドバイザー　小松郁夫氏（常葉大学大学院教授）、

入船中学校長　緒方利昭委員（会長）、入船南小学校長　鞠山誠人委員（副会長）、

入船北小学校前 PTA 会長　新田裕子委員（副会長）、

入船北小学校長　手塚和真委員、入船北小学校 PTA 会長　山口晶子委員、

入船南小学校 PTA 会長　原口貴彰委員、入船南小学校 PTA 副会長大下玉美委員、

入船中学校 PTA 副会長　中村智子委員、入船中学校学校評議員　坂上ますみ委員

教育総務部長　米本慎一、教育総務部参事　山髙智美、教育総務部次長　角田義弘

教育総務部次長（教育政策課長）鈴木忠吉

（事務局）

学務課長　佐藤伸彦、学務課長補佐　鈴木孝一、教育政策課長補佐　船橋紀美江、

教育政策課主査　佐藤克文、教育政策課主任主事　小倉隆志

４　議　　題

・会長、副会長の選出

・これまでの経緯、学校統合に係る組織、検討課題等の説明

・学校統合に向けた取り組みに関する情報交換

・『新しい学校づくり』に関する意見交換

５　資　　料

（当日配布）

・学校統合におけるこれまでの経緯と平成２４年度の取り組み

・入船地区学校統合に関する組織図

・入船地区学校統合懇談会設置要綱

・入船地区学校統合だより

・新しい小学校における学校づくりについて（案）

６　会議経過

（１）事務局の説明

・学校統合におけるこれまでの経緯について

・入船地区学校統合に係る組織と入船地区学校統合懇談会の位置づけについて

・検討課題に関する平成２４年度末の回答についての確認

・事務局の説明に関する質疑

委　員：　昨年度は保護者向けの説明会が数回あったが、今年度は予定があるのか。

事務局：　総合的にかかわる情報については、ホームページや学校、ＰＴＡを通して情報を提供していく。現時点では説明会の開催は考えていないが、要望があればその都度検討させていただく。

（２）新しい小学校における『魅力ある学校づくり』について

〇統合にむけての取り組みに関する情報交換

・学校統合に向けた入船北小学校と入船南小学校の連携について

委　員：　円滑な学校統合に向けて、子ども同士の交流活動を進めている。

５月２日には総合公園で合同の全校遠足を行い、交流を行った。短い時間ではあったが対面式を行った。６月１０日には、入船南小学校の３年生が学区探検で入船北小学校の屋上から学区を見るなどの学習を行った。６月２６日には、入船北小学校の２年生が入船南小学校に行き、音楽室や図書室など学校内を案内してもらった。ほかの学年でも今後、無理のない範囲で学校行事や部活動も含め交流を企画している。

夏休みには教職員の交流も考えている。校務分掌ごとに交流し、共に分掌について考えていくのもよいのではなかいと考えている。

委　員：　両校で学校経営の重点などの摺合せをしていくことも考えられる。校長どうしは毎月、互いの学校を行き来して情報交換を行っている。

両校の２年生が「みどりの森のプロジェクト」に参加している。統合後、６年生になった子どもたちが一緒にどんぐりを植えられたらと考えている。

今年度、入船南小学校と入船中学校は「千葉県教育研究会理科教育部会研究大会浦安大会」での発表があり、研究を進めている。入船南小学校の授業研究会に入船北小学校の教職員が参加するなど、学習指導面での交流も行い、子どもたちが同じ学びを経験できるようにしていきたい。また、入船中学校も発表を行うので、入船中学校への接続も考えて学習面での交流ができたらよいと考えている。

・小中連携・一貫教育に関する取り組みについて

委　員：　入船中学校は来年、仮称第９中学校と分離する。入船北小学校と入船南小学校の子どもたちが通ってくることになるので、小中学校の教職員がお互いの授業を見合うことも大切であると考えている。５月には理科の授業を入船南小学校の教職員が参観した。中学校の教職員が小学校の授業を参観するという機会もつくっていきたい。

入船地区健全育成連絡協議会でも、入船地区を盛り上げるために連携について話し合っている。入船地区では毎年、地域文化祭を行っている。今年度は３月に実施する予定である。

１０月２７日には入船中学校で美化活動を行う。入船南小学校と入船北小学校周辺の自治会を巻き込み、小学校の上級生にも呼びかけていきたい。

９月には体育祭がある。入船南小学校、入船北小学校の子どもたちにも「未来の入中生」として参加してほしい。

情報の連携だけでなく、行動の連携もしていきたい。

委　員：　６月２６日に入船北小学校と入船南小学校の保護者同士の交流会を行った。両校の校長先生方や教育委員会の方も来ていただき、場所を確保するうえでも便宜を図っていただいて感謝している。ズンバ（ダンス）には４８名、その後の交流会には２８名の保護者が参加した。アンケートでは、１００％が楽しかったと回答した。こうした交流会を継続した方がよいという意見も多数を占めた。統合に向けて、今後も学期１回のペースで行っていきたい。魅力ある交流会を行いたいので、ぜひ予算を用意していただけるとありがたい。今回は、保護者の中にズンバのインストラクターをしている方がいたので安価でお願いできた。

委　員：　地域の視点から意見を述べたい。入船地区には入船中学校で行っている地域文化祭がある。小学校両校でも入北フェスティバル、入南祭りがある。お互いの内容や特色を話していただき、交流するとよいと思う。入北小は遠いが入船中の地域文化祭には多くの人が集まっているという実績がある。入船北幼稚園はすでに閉園しているが、入船北幼稚園時代のお父さんの会は、毎年文化祭に出店している。

委　員：　地域文化祭は毎年１０月に行っていたが、今年は高洲公民館の文化祭が翌週に予定されており、過密日程にならないように考慮して３月に行う予定である。

委　員：　入船南のサッカーチームでコーチをしているが、コーチ同士では統合の話も出ている。入船北小学校の子どもたちは美浜北小学校で練習をしている子も多いと聞いている。地域のスポーツチームについても交流していけたらよいと思うが、情報をいただけるとよい。

事務局：　教育政策課で市民スポーツ課に問い合わせ、情報を提供していきたい。

〇新しい学校における魅力ある学校づくりについて

・事務局より『新しい学校づくり（案)』の説明

事務局：　学校統合に伴い開校する新しい小学校については、学校、家庭、地域、行政が一体となって考えていきたい。今回、お示しする案に基づいてそれぞれのお立場からご意見を伺いたい。

新しい小学校における『魅力ある学校づくり』については資料４にある３つのコンセプトを考えている。

一つ目は「併設を生かした１小１中の小中連携・一貫教育推進校」である。本市では義務教育９年間を見通した学習指導や生徒指導などを行う小中連携・一貫教育を推進している。入船中学校区は学校統合に伴い、１つの小学校と１つの中学校から構成される中学校区となる。この良さを生かした小中連携・一貫教育を推進したい。これまでに行った校長先生や教頭先生、教務主任の先生へのヒアリングでは、入船地区は小中連携・一貫教育を通して「学力の向上」を重点としてはどうかというご意見をいただいている。具体的には、小・中学校の先生のティームティーチングによる外国語活動の授業や小中一貫した理科教育の充実などがあげられている。

二つ目は「豊かな交流を重視した学校づくり」である。小中連携・一貫教育を通した小・中学校の児童生徒の学びあいや交流活動はもとより、隣接する幼稚園児との交流をとおして子どもたちの豊かな人間性、社会性をはぐくんでいきたい。また、今回の学校統合にあたっては「入船」という字を大切にしたことからも地域の方々との交流も充実させ、地域の活性化にもつなげたい。具体的にどのような交流を行うかについては、学校の運用となる。

三つ目は「入船北小学校・入船南小学校の良さを受け継いだ新しい学校づくり」である。両校の良さを受け継いだ新しい学校づくりを目指したい。両校の良さとはそれぞれ、どういうものがあるのか、ぜひご意見を伺いたい。

委　員：　新しい学校づくりについては、具体的な特色が見えるとよい。たとえば英語に力を入れて、卒業までに英検３級が取れるぐらいの英語力が身に付くとか、情報教育に力を入れて新しいパソコンで学べるなどである。

今から「浦安初の・・・」というような大々的なスローガンを掲げてほしい。

小中連携について説明があったが、保護者の間ではあまりウエルカムではない。保護者は中学生と一緒ということで何かトラブルが起こるのではないかと心配している。

入船北小学校の保護者は、入船南小に通わせるのか美浜北小に通わせるのかという選択をしなければならない。今年度中にも早く情報を出してほしい。

事務局：　新しい学校づくりについて、各学校の校長先生や教頭先生、教務主任の先生にもヒアリングを行った。小中連携・一貫教育を通して外国語活動や理科教育に重

点を置くのはどうかというご意見をいただいた。また、地域とのつながりをより深めるため地域との連携の充実もあげられた。地域文化祭は新しい学校の特色になると思う。

委　員：　学校本体の教育の議論とまわりの地域の議論は分けた方がよい。地域のことは放っておいても親、地域がやる。教育本体の部分において、市がどれだけ予算をとってやるかを親は見ている。新しい学校づくりについて、保護者へのアンケートをとり、生かしていけば親はサポートにまわると思う。

委　員：　地域と学校の問題を分けて考えるという意見に賛成である。まず、学校、教育本体をというのは説得力がある。

外国語の話が出ていたが、外国語の授業にしても、中学校の内容と小学校は違う。中学校の教員だけでなく、小学校の外国語教育専門の教員を配置すべきだと思う。

理科教育については、今、民間の理科教室は大人気で、公民館のものも抽選になると聞いている。たとえば、学校と違い一人一人に顕微鏡があるという面も大きいと思う。理科教育を充実させていくのであれば、そうしたことも必要だと思う。

また、子どもを説得する上では、給食も大きい。予算がかかることなので難しいと思うが、たとえば自校給食というのは非常に魅力的である。センター給食がよくないということではないが、温かいものを温かく、冷たいものを冷たくということはとてもよいことであるし、作るにおいや音というものも食育につながる。食育の視点でも、自校給食はとてもよいと思う。

ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ：　小学生と中学生の交流について、不安という意見が出ていたが、私がかかわっている地域ではそれによってトラブルが起きたという話は聞かない。京都の例では中学生が優しくなってよい形で育っている。福島でもスクールバスの登校中、中学生が優しく注意するなどしており、心配ないと思う。

小中連携を進めていくと兄弟のような関係ができる。今は少子化で兄弟が少ない家庭も多いので子どもたちの成長にとって有効である。

入船中学校は分離によって小さな中学校になる。中学校の教員が小学生を教えるということは専門性が生かされる理科や外国語、音楽や美術などの技術系が有効である。

子ども同士の交流だけでなく教員同士も９年間の学びを意識し始めていることはよい。横浜では２か月に１回、小・中学校で授業を見合っている地区がある。(浦安市では)忙しい校長先生方が月に一度、行き来して情報交換をしていることは素晴らしい。

新しい学校づくりについては、最先端の学校をつくるつもりでいくとよい。既存の学校ではなかなか変われないので今が変わるチャンスである。

昼は学校、夕方から夜は地域で子どもを育てていかなければならない。

事務局：　市内でも小中学校が一緒に生活していると中学生は優しくなる。明海南小学校と明海中学校の合築校舎で小中学生のトラブルは１件もなかった。

地域のサッカークラブに所属している中学生はなかなか部活動に所属できないので、小学校のサッカー部で一緒に活動していたこともあった。

委　員：　中学校の先生はエキスパートなので（小学生も）教えてもらえたらよい。

両校の良さの継承という説明があったが、このタイミングを利用して継承よりも進化という意識で統合を進めていった方がよい。

ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ：　「円滑な統合」に加えて「発展的・創造的な統合」にするとよい。

（３）その他

・質疑等

委　員：　統合に際して入船中学校はどうあるべきか示してほしい。分離した後、入船中学校は小規模の学校になる。小学校と連携するためには人的配置が必要であるので、要望したい。

委　員：　統合に際してのＰＴＡ，保護者のかかわり、新しい学校のＰＴＡづくりについてどのようにしたらよいかアドバイザーに教えていただきたい。

ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ：　どうしたらよいかということに対してこれが正解という方法はない。両校が互いに折り合いをつけ、よさと知恵を合わせて粘り強くやっていくことである。右往左往しながらつくるプロセスが大切である。まずは子どもたちの教育の中身が大切である。保護者に何ができるか、ＰＴＡであるからＴ（教師）も巻き込んで進めていくことが大切である。ＰＴＡの組織にしても変えたかったけれど今までの経緯等で変えられなかったものもあると思う。この機会に変えた方がよいのではというものもあると思う。役員の選び方や活動の仕方等、他から学びつつ進めていくとよい。

委　員：　入船北小学校では、統合委員会を立ち上げたが私たちは素人なのでＰＴＡの統合に向けてどのように進めていったらよいか、資料や情報をいただかないとわからない。２学期以降に動かなければならないと考えている。事務局にはアドバイス、情報をいただきたい。２学期以降も交流等も進めていく。事務局から最初の声かけはしてほしい。

事務局：　生涯学習課にも声をかけ、情報等の提供を行っていく。

委　員：　入船中学校としても分離する（仮称）第９中学校のＰＴＡはどうなるのか気になる。

委　員：　ＰＴＡのことについては、資料等の処理も含め、どのようにしていくかという質問が上がってきている。

委　員：　中学校も魅力的なものにしていくことが大切である。昨年度も（懇談会の折に）言わせていただいたが、制服を新しくするというのもよいのではないか。

ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ：　制服の色使いについて、海外は原色を大切にしているが、日本はどこも中間色で暗いイメージがある。色使い等においても子どもたちに良い教育環境を作っていく必要がある。これからはデザイン力や企画力ということが求められる。

最後は地域と子どもの教育環境をどうしていくかということである。具体的にやろうとすると大変であるが、大人たちが汗をかいてよい教育環境をつくっていく。大人の大変さは子どもたちも見ている。自分たちのために大人たちが頑張っている姿を見て、子どもも頑張ろうとなる。それが教育となる。

行政に頼るばかりでなく、意見も出し、自分たちもやるというふうにしていくことが大切である。

５　お礼の言葉

閉会